あわよくば

2MARK勝負

選手はツラいよ…。出待ち入り待ちの現在地

「やっても文句を言われ、やらなくても文句を言われ…。何が正解なんでしょう。どうしたらいいんですかね？」。平本真之がぼやき…、いや切実に嘆いた。1月の江戸川周年の時の話だ。平本は最終日の管理解除後、タクシーに乗り込む前に出待ちをしていたファンに対応。それがSNSで炎上した。

ここで一つ確認しておきたいが、コロナ禍以降、選手の出待ち入り待ちは禁止されている。「コロナ終わったのに？」と思うファンもいるかもしれないが、解除はされていない。つまり出待ち入り待ちは「してはいけない行為」ということだ。

選手にもファン対応をしてはいけない旨が通達されている。それでも最終日最終レースまで残ってくれたファンに、何かしらの対応をしてあげたいというのも選手心理だ。

ただ、当然、全員にすることは不可能だ。それがかえって炎上するきっかけにもなった。だが断った池田浩二はもっと炎上した。「ルール」に従っても文句を言われてしまう世の中だ。

先日、児島を訪問する機会があった。その帰途で、選手に写真撮影をお願いする出待ちファンの姿が散見された。もちろん禁止行為だ。競走会や施行者等、関係職員は誰もいない。トラブルの原因にもなる行為。だが選手は快く引き受けてしまう。いや、断れないという方が正しいかもしれない。さらなるトラブルや誹謗中傷を生む恐れもあるからだ。選手だって本当は断りたくない。だが若い女子選手は「禁止されていますが、断ると『あいつは態度が悪い』とか『弱いくせに偉そうに』なんて言われそうじゃないですか」と危惧。ダメだと分かっていてもしてしまう心理に陥っている。

少し前に、関係団体より入り待ちを解禁しようという提案が出されたそうだ。出待ちは禁止だが、〝入り〟での対応はOK、それがファンの「ガス抜き」にもなるという意見からだ。だが最終的には大多数の反対意見で却下された。やはり解禁後のトラブルや選手に対する誹謗中傷の方が懸念されるからだろう。平本は「ルールなので、出待ち入り待ちのファン対応は断腸の思いで断らせていただきます」と発信した。「これが正解かは分からないですが、ルールと言うしかないですもん」。もはや悲痛とも思える訴えだ。

選手にこんなことを考えさせることは、いちファンとしては非常に悲しい。選手もファンもルールを守る――。まずここが守られなければ、出待ち入り待ちの完全解禁なんて、夢の話だ。

（渡辺将司）